

## 笹月健彦先生を悼む

東京医科歯科大学

木村 彰方

私が初めて笹月健彦先生とお会いしたのは、1983年2月でした。当時、私は九州大学大学院医学研究科（内科系専攻）を修了間近で、9月からパスツール研究所免疫部門分子生物学分野に留学することが決まっていた。その頃、笹月先生は、東京医科歯科大学難治疾患研究所人類遺伝学分野の教授でしたが、4月から九州大学生体防御医学研究所遺伝学部門の教授を兼任されることになっており、九州大学での拠点形成の一環として私に助手ポジションのオファーがありました。そのため、私は東京医科歯科大学に笹月先生にお会いしに行ったわけです。

当時の難治疾患研究所は湯島地区と駿河台地区の2つに分かれていて、笹月先生は湯島地区の1号館（当時は御茶ノ水駅側から正面に見える建物でしたが、その後取り壊されており、現在は東京医科歯科大学病院の敷地になっています）にいらっしゃいましたが、もともとは病院の診療棟として使われていた建物で、かなり年期が入っていましたし、廊下には所狭しとフリーザーや研究機器が並んでいるようなところで、ここでNatureに発表された研究が行われているのかとの驚きもありました。

笹月先生は、慶應大学から東海大学に異動された猪子先生との共同で、ヒトcDNAライブラリーからオリゴヌクレオチドをプローブとしてHLA-DQ $\beta$ 遺伝子cDNAをクローニングする研究を進められており、その意図やこれからの研究展開について熱く語られましたが、クローニングに時間がかかっているとも話されていました。当時私は、ヘモグロビン異常症の研究をしており、 $\lambda$ ファージを使って患者さんのゲノムライブラリーを作製し、ヘモグロビンcDNAをプローブとして、プラークハイブリダイゼーション法を用いてライブラリーからヘモグロビン遺伝子ゲノムクローンを単離していましたが、オリゴヌクレオチドプローブを用いてcDNAライブラリーからクローンを単離する手法の煩雑さ・困難さは想像に難くありませんでしたので、猪子先生はかなり苦労されているのではないのでしょうかとお話しした記憶があります。

もともと私が大学院に進学した理由は、大学を卒業した1978年に九州大学第一内科に入局し、主治医として患者さんに接した際に、いかに多くの難治疾患があるのかを目の当たりにして、根本的な治療を行うためには病気の原因を明らかにしなければならないのではないかと考えたことにあります。その当時、種々の難病とHLAが関係しているとの論文が多く発表されていましたし、丁度そのころに第一内科の教授である柳瀬敏幸先生から、「君は大学院に行って遺伝を勉強したまえ、これからは病気が遺伝子でわかる時代が来る」と勧められたこともあり、HLAを遺伝子として研究することを目指した次第です。

柳瀬先生は、東京医科歯科大学難治疾患研究所の前身である医学部附属遺伝疾患研究施設の教授から九州大学第一内科の教授になられましたが、笹月先生は九州大学を卒業後にインターン生活を経て東京医科歯科大学において柳瀬先生のもとで人類遺伝学の研鑽を積まれています。冒頭に記載しましたように、私が笹月先生の教室の助手に採用していただくに至った背景には、柳瀬先生からの推薦があったようですが、人の縁を感じます。

前述のように、私は大学院でヒトのヘモグロビン遺伝子の研究を行う一方で、大学院修了後は留学してMHC研究を行いたいと考え、当時マウスH-2遺伝子cDNAのクローニングをNatureに発表していたパスツール研究所のPhilippe Kourilsky教授に留学希望の手紙を書き、ポストドクとして受け入れるとの返事をいただいたところでした。恥ずかしながら大学院生時代には笹月先生をよく存じあげませんでした。大学院（内科系専攻）の合同講義の際に、九州大学第二内科から笹月先生の部屋に行かれて研究されていた西村泰治先生が研究内容を発表されていたこともあり、東京医科歯科大学ではHLAの細胞生物学的研究が行われていると認識したものの、それを遺伝子レベルで研究することと直結して考えていなかったのが当時の私でした。

私の留学中には、笹月先生が渡仏された際にご連絡をいただき、シャンゼリゼやモンパルナスのカフェで国際的な活動のお話を伺ったものです。また、笹月先生は Kourilsky 教授と同年齢でしたし、二人ともジョークが好きな一方で哲学的な思考を好まれることもあって、当時からずっといい友人づきあいをされたと聞いています。

留学から戻って、笹月先生のもとで HLA-DQ  $\beta$  鎖のゲノム遺伝子構造の解析や遺伝子発現パターンの研究をスタートしましたが、笹月先生から「HLA 研究をいくらやっても笹月の仕事だと思われるから、HLA とはまったく違うテーマの研究もやっておく方がいいよ」とのアドバイスもあり、縁あって久留米大学医学部第三内科との共同で遺伝性心筋症の研究をスタートしましたが、必要な研究費については常にサポートしていただきましたし、私が東京医科歯科大学難治疾患研究所の教授になれたのも、難治疾患である遺伝性心筋症の分子遺伝学的研究を行っていたことが大きな要因であったと考えています。

最初に笹月先生とお会いしてから 40 年が経ちました。九州大学生体防御医学研究所時代には、笹月先生の指示のもとで、1991 年の国際ワークショップで PCR-SSO 法による HLA-DNA タイピングの企画・実行・解析に携わりました。実際には、3 年後の 1991 年に発表しても色褪せないような研究となることを 1988 年に企画して、実験プロトコルを確立するとともに、全世界の 120 研究室にオリゴヌクレオチドプローブを配布して、約 22,000 件のデータを集めて解析することで、数多くの new allele の発見や、人類学的考察や疾患感受性研究に繋げることができました。笹月先生に任せられていた大仕事でしたが、それが笹月先生との一番の思い出となりました。私が東京医科歯科大学に異動後には、笹月先生に難治疾患研究所の運営諮問委員になっていただき、研究所の運営や目指すべき方向について、大所高所からのご意見・示唆をいただくことが出来ました。笹月先生は、「自分では出来ないとわかっている、目指すべきところを示すようにしている。自分ができる範囲でしか言わないのなら、それは発展にはつながらないよ」とよくおっしゃっていましたが、常に高見を目指すことの重要性を説く貴重な教えであったと思います。

2023 年 2 月初めに笹月健彦先生の訃報に接した際には、まさに巨星墜つての感がありましたが、笹月先生が遺された教えを糧として過ごしたいと思います。笹月先生どうもありがとうございました。ご冥福をお祈りします。



写真：笹月先生はお酒の席がお好きでした。